

## 進化する日本政府の海外邦人援護体制

邦人退避(在外邦人等の輸送)の歴史は、国際情勢の緊迫化に伴い、民間の手段から自衛隊による能動的な輸送へと進化してきた。日本政府は、海外で紛争や大規模災害が発生した際、在留邦人を安全な国や日本へ保護・輸送する取り組みや国際条約などの枠組みを拡充している。

### イラン・イラク戦争時の邦人救出劇

1980年代までの邦人退避は、民間航空機やチャーター機、あるいは友好国の協力を受けての避難だった。当時の状況を伝える本誌(2017年6月号)の記事を紹介したい。筆者は当時の日外協の常務理事・事務局長 近藤 龍氏で、丸紅(株)の社員時代にイランの首都テヘランから一家でトルコのイスタンブールに退去した体験を寄稿している。

#### 邦人救出事情と 「エルトゥールル号遭難事故」

“パパンパリーン!!”、真夜中の2時半、突然の耳をつんざくすさまじい音とともに苦難の1週間が始まった。

イラン・イラク戦争が始まって4年半が過ぎたある夜、イランの首都テヘラン、寝静まる郊外の住宅地に雷に似た衝撃音が何度か響きわたったかと思うと、遅まきながら空襲警報が鳴り響いた。

「ついに来たか」慌てて飛び起きた妻や3歳と1歳の子どもを抱え階下の大家さん夫婦と、イラン軍の対空砲火がまるで花火のように打ち上がる最中、防空壕を兼ねた地下室に避難する。1985年3月、両国は空爆とミサイル攻撃で互いの首都攻撃を開始した。

#### トルコに救われ無事テヘラン脱出

テヘランに駐在していた筆者とその家族は、その夜以降、頑丈なホテルに移りテヘラン脱出のチャンスを探すことになるが、日本

以外の国が自国民救出のため救援機を飛ばす中、日本からは日本航空も自衛隊機も来ず、邦人200人以上が命の危険にさらされることになった。

イラク軍爆撃機による連夜のテヘラン空襲から4日目、イラクのサダム・フセイン大統領は48時間後の3月19日午後8時以降、イラン上空を飛ぶ航空機は軍用、民間を問わず無差別に攻撃すると宣言。各国民がイラン脱出ラッシュでパニックに陥る中、唯一救援機が来ないまま取り残された日本人の脱出は一層困難を極め、みな絶望的な気持ちになっていた。

この絶体絶命の危機を救ってくれたのは日本ではなくトルコだった。トルコのオザル首相(当時)は、日本大使や企業からの懇請もあり安全が確保できていない日本人の救出を決断、トルコ航空に救援機派遣を指示したのだ。直ちにトルコ航空はクルーを募り、多数のパイロットとCAが身の危険を顧みず自発的に手を上げた。

フセインが警告した無差別攻撃の始まる午後8時の数時間前に夕闇のテヘラン空港を飛び立った2機のトルコ航空機は、疲れ果てた日本人とその家族215人を乗せて灯火管制で真っ暗なテヘラン上空を抜け出し、光まばゆい大都市イスタンブールに無事着陸した。朝から行列に並び、怒号と混乱で喧騒状態の飛行場を後にして、ようやくイスタンブールに着いた筆者家族4人も疲労困憊の中、大勢の報道陣に取り囲まれていた。(以下、省略)

\*本誌 2017年6月号 FOCUS(P.24～25)から抜粋